

## 使徒言行録 第16章1～10節

使徒言行録15章ではエルサレム教会で会議が行われたことが記されていました。異邦人伝道が進んでいく中、異邦人キリスト者にも割礼を含む律法の諸規程を厳格に守らせるべきだというユダヤ人キリスト者からの強い要望の中で開かれた会議で、エルサレム教会が若干の制限を加えながらも、事実上、イエス・キリストを信じる信仰以外に律法を遵守しなくてもよいと結論付けたのがこの会議でした。パウロが主張していた信仰義認論、ただ信仰によってのみ義とされるということをエルサレム教会が認めたのです。

自分たちの主張が認められ、異邦人にもキリストの福音の道が開かれたことを喜んだパウロたちは、意気揚々と異邦人伝道に向かいます。使徒言行録16章以下にはその様子が記されています。パウロは一番弟子のテモテを同行させ、伝道旅行に出かけます。そこから今日の聖書の箇所になります。

今日の聖書の箇所で、最初に少し見ておきたいことがあります。それは、パウロと同行していた人たちのことです。6節では、パウロ一行のことを「彼らは」と三人称で表現しています。これより前の箇所では、パウロ一行のことをすべて「彼らは」と表現しているのですが、ところが10節にはこのように記されています。「パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした」。そしてこれ以降、パウロ一行はそれまでの「彼ら」という三人称から「わたしたち」という一人称の表現へと変わっていきます。これは、この使徒言行録を記したルカが、この「わたしたち」と言い方が変わったところからパウロたちの一行に加わったのではないかと考えられています。使徒言行録の著者は以前にもお話ししましたように、ルカによる福音書の著者と同じです。ルカは異邦人キリスト者で、この使徒言行録16章のマケドニアに渡るあたりからパウロたちと同行したと考えられています。

さて、このようにして伝道旅行に出かけていったパウロの一行は、6節からたいへんなことに巻き込まれます。一行はアジアで御言葉を語ることを聖霊から禁じられ、またピティニア州に入ろうとした際、イエスの霊がそれを許しませんでした。このことに関しては後でまた触れたいと思いますが、ここでは実際に何があったのかは記されていませんが、パウロ一行は自分たちの立てた伝道旅行の計画を変更しなければならませんでした。私たちもさまざまな出来事の中で、教会活動や伝道計画を変更せざるを得ない状況に陥ることがあります。コロナによって教会活動のすべてを見直さなければならなくなったときもそうでした。しかしそのことによって、何もなかったときにはまったく気付くことができなかったさまざまな点が教えられることもたくさんありました。時には立ち止まったり回り道をしたりすることで、思わぬ発見となることもあります。パウロたち一行も、アジア州やピティニア州に入ることを禁じられたことで、マケドニアというヨーロッパでの伝道を始めることができました。神の御計画は人の思いよりはるかに勝るのです。

こうしてアジア州やピティニア州に行くことを禁止されたパウロたち一行はトロアスに滞在したのですが、パウロはそこで幻を見ます。トロアスの対岸からマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と懇願したのです。ここで使われている「助けてください」という言葉は、原語では「叫ぶ」という言葉と「走る」という言葉が合成されていて、助けを求めて走りながら叫んでいるというような切羽

詰まった様子が表されています。このマケドニア人は何を助けてほしかったのか、具体的なことは記されていませんが、この幻を見たパウロ一行は10節にありますように、この叫びを受けてマケドニア人に福音を告げ知らせるために召されているのだと確信し、マケドニアへと渡っていきます。助けてくださいと走りながら叫んでいた人は、イエス・キリストの福音による救いを求めていたのです。こうして一行は、今のトルコから対岸のギリシアの方に、すなわち、アジアからヨーロッパへと渡っていくのです。

さて、今日の聖書の箇所では私たちが一緒に考えてみたいことは、パウロが幻を見た際に、主の御使いが来たとか、主の幻が降ったという言い方をしていないということです。聖書ではよく、誰かが幻を見る際に、主の御使いが来たとか、主の霊が降ったというような表現を用います。けれども今日の聖書の箇所では、パウロはただ、「神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至った」と記されています。パウロは、自分の見た夢によって、神様が自分たちを召されているのだと「確信するに至った」のです。この確信するということがとても大事なことなのです。

私たちが信仰生活を送る中でさまざまな問題に出会うとき、それが神様からきたものなのか、それとも自分の勝手な思い込みなのか、判断するのが難しいときがあります。そんな時、聖書に記されているように、これは神様からの幻であると天使が語ってくればよいのですが、実際にはそんなことはありません。いきなり天使が私たちの目の前に現れて、御告げを語ることなど起こらないのです。私は一度も経験したことはありません。ところが今日の聖書の箇所では、パウロが幻を見たとき、神様がパウロたちを召されているのだと確信するに至ったと記されています。パウロは、自分たちが召されていると確信したのです。そして、これがとても大事なことなのです。自分で確信して決断して行動すること。神様は私たちの思いや意思を尊重してください。神様は私たちを、ロボットのように自分の意思を持たない存在として造られたものではありません。私たちは、自分で考え、自分で決断し、自分で行動に移すことができます。そしてそれが、とても大切なことなのです。最初に出てきた出来事、パウロ一行がアジア州で御言葉を語ることが聖霊から禁じられたことやピテニア州に入ろうとしたときイエスの霊が許さなかったことも、実際には彼らの行く手を阻む何かが起こったのか、あるいは彼らが計画を変更せざるを得ない事情ができたのだらうと思います。けれどもそれをパウロたち一行は、聖霊から禁じられ、イエスの霊に許されなかったことだと考え、反対の方向、マケドニアの対岸にトロアスへと導かれていったのです。自分で考え、自分で決断し、自分で行動する。そうやって私たちが選んだ道を、神様は共に歩んでくださり、祝福してくださるのです。

今から50年以上も昔の話になりますが、「ポセイドン・アドベンチャー」という映画がありました。私が高校生の時に見た映画ですが、ポセイドン号という1,400人乗りの大きな豪華客船が嵐にあって転覆してしまい、そこからわずか数名の人たちが逃げ出すという、アドベンチャー映画です。

そのころ、私はクリスチャンではありませんでした。教会に行ったこともなければ、キリスト教にまったく興味も関心もありませんでした。ところが、クリスチャンになってからこの映画のストーリーをよく考えてみると、実はとてもキリスト教的な映画ではないかと思うようになりました。

この映画の中に、キリスト教の神父さんが二人出てきます。一人はジーン・ハックマンという名優が演じた型破りなスコット神父。彼は教会の教えと違うことを説き、外国の教会に左遷されるためにこの船に乗っていました。もう一人は年老いた神父で、この人はみんなからの信頼が厚く、新しい働きのために外国へと出かけていくためにこの船に乗っていました。この二人の神父さん、性格も考え方も、まったく対照的でした。そしてその違いは、船が転覆したときにはっきりと現れます。

この豪華客船のポセイドン号が嵐の中で船が転覆し、船は上下がさかさまになり、人々はパニックになってしまいます。けがをしたり、年を取って歩けない人たちは、大きなホールに集まって、そこで救助隊が来るのを待つことにしました。ホールと言っても、上下がひっくり返っていますから、実際には天井になります。そこで大勢の人たちは待つことにしたのですが、その中心にいたのが年老いた神父さんでした。待っていれば必ず神様が助け出してくださる。老神父は神様を信頼し、そこに残された人々を励ましなが、助けが来るのを待ちました。けれども、穴の開いた船には海の水が入ってきて、みんなが待っていたホールも、そこにいた人たちと一緒に水の中に沈んでいきました。

もう一人の型破りなスコット神父は、ここに残ってはいけな、自分たちで何とか生き残るために道を切り開かなくてはならないと考えました。そして彼の考えに賛成してくれた十名ほどの仲間たちと一緒に、船のいちばん底の方に向かって歩き出します。船が180度ひっくり返ったから、船底の方に行けば助かるに違いない。そう考えたのです。ところが、ひっくり返った大きな船の中を進むのですからなかなか思うようにいきません。船は何度も爆発を繰り返し、そのたびに仲間が少しずつ失われていきました。そしていよいよ船のいちばん底に着くという時に、最後の試練が待っていました。スコット神父は自らの身を犠牲にして、残りの人々を助けます。彼は神を呪いながら死んでいきました。

この映画に出てくるスコット神父は、自分たちで何とか生き延びようと努力します。彼は自分で考え、自分で決断し、自分で行動しました。その結果、スコット神父は助かりませんでしたが、彼に従った数名の人たちが無事助かることができたのです。

自分で考え、自分で決断し、自分で行動する。そのようにして自分たちで選んで行動するときに、神様がその道を共に歩んでくださり祝福してくださると信じる。それが、今日の聖書の箇所に出てくるパウロの「確信」でした。そしてパウロは、この確信によって、トロアスの対岸にあるマケドニアに渡っていきます。トロアスは現在のトルコの西の端、アジアになります。そして対岸のマケドニアはヨーロッパになります。こうして、パウロたち一行はアジアからヨーロッパへと福音を告げ知らせるために渡っていくのです。

私たちは新しい形の教会活動のあり方を模索し始めています。これまでは外から礼拝に人を連れてくるという形を取っていました。けれども今は、教会員ではない多くの人たちが、礼拝にではなく、この教会の建物に出入りしています。地域にニーズに応える教会としての歩みを始めたのです。私たちはこの垂水の地に立つ教会として、まずきちんとこの地に住む人々の叫び声を聞き取っていかなければなりません。マケドニア人の叫び、それは対岸の叫びであり、キリスト教を知らない人たちの叫び声です。そしてそれは、叫びながら走ってくるほどの切羽詰まった叫び声でした。私たちもこの叫び声にしっかりと耳を傾けて、この地の人々に仕えていく教会になりたいと願います。

お祈りしましょう。